

今日は、わたしの心の中にある「パ」についての話から宣教（説教）を始めさせていただきます。今日の聖書の個所の学びにも重なってくると思われます。

「脱構築」という言葉で有名なジャック・デリダというユダヤ系のフランス人哲学者がいます。以前、作家ブランショの解釈の本で「境域」というタイトルの本が出版されました。

その中に「パ」という論文があります。発音は日本語では「パピプペポのパ」のパ、「グー、チョキ、パーのパ」です。この「パ」とはフランス語で「歩み、足音、戸口、海城、峠、隘路（あいろう）」などの意味があるそうです。この言葉から「ついていく」という意味が浮かびあがると言われます。聖書の「イエスの後について行く。」と重なりあうと言えます。ところが、この「パ」は、もう一つ、否定の「ne(ヌ)」と一緒に使用され、発音は「パ」と読まれるということです。同じ「パ」という発音なのに、肯定と否定、「はいといいえ」の内容があるということです。ややこしい～。言葉遊びのようですが、考えてみれば「従っているようで従っていない自分」「イエスさまの後について行っているようで、そうでない自分がある。」という現実の自分の姿を見るような気がします。

しかし、ありがたいことには、イエスさまは「ついていけないかのような私」を受け入れてくださっている方なのです。今日の聖書の箇所は、主イエスの弟子であるペトロの新しい旅立ちが記されています。復活のイエスが弟子のペトロを再度招かれた場面です。この再びの招きは、ペトロに対する使命の委託される場面です。かつてガリラヤ湖畔でイエスに招かれたペトロは、イエスの「わたしについて来なさい。」と招かれイエスに従って行ったのです。しかしペトロは主イエスが十字架で処刑される以前は、「イエスと一緒に逮捕され、たとえ死ぬようなことがあっても、あなたを知らないなどとは言いません。」と強気の発言をしていましたが、イエスが実際、ユダヤの当局者に逮捕されると、ペトロは後について大祭司の屋敷の中庭までついて行ったのですが、そこで回りの人々から「あなたはイエスの仲間だ」と詰問されると、3度に渡って「私はイエスを知らない」と言ってしまった過去があるのです。残念ながらペトロはイエスに従うことができなかったのです。しかし、イエスさまを再びガリラヤ湖畔で招かれたのです。ペトロはここから心から生まれ変わって行ったのです。

復活のイエスさまがガリラヤ湖のほとりで、その姿を弟子たちに現わされた

場面です。朝の食事をした後、イエスはペトロに尋ねました。「5:食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、『ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか』と。ペトロが、『はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです』と言うと、イエスは、『わたしの小羊を飼いなさい』と言われました。ペトロは弟子の代表的存在でした。性格は行動的で、熱血漢で、その反面、多少思慮がたらず、落ち着きかけるところがあったようにも見受けられます。今日の場面は、イエスとペトロとの個人的な会話です。「わたしを愛するか」とイエスに問われて、ペトロの性格であれば「私はあなたを愛しています」と言うところでしょうが、彼はこの時、その様に言うことはできませんでした。『はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです』というような少しとまどい気味の表現になっています。今日の箇所は、人間として破れ果ててしまったペトロが立ち直る大切な再出発の出来事です。誰にでも人生の再出発の時はあると思うのです。人生は何度でもやり直してよいのだと思います。

わたしも、以前牧師としてどん底に落ちた時、夜の暗闇の中でイエスの十字架を心の目で見て立ち上がった経験があります。そして「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり歩かない。」という聖書の言葉を心の耳で聞いて再出発できたのです。真実な言葉にはいのちがあるのです。詩編23編3節に「魂を生き返らせてくださる。」とある通りです。また箴言24章16節にも「神に従う人は七度倒れても起き上がる。」とありますが、何度倒れても良いのだと慰められます。

さて、今日の箇所でイエスは3度にわたってペトロに「私を愛しているか」と尋ねました。これはペテロが3度イエスを拒んだ事と関係していると思います。「17:三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロは、イエスが三度目も、「わたしを愛しているか」と言われたのでペトロは悲しくなりました。彼が「悲しくなった」のは、決してイエスの間に悪意を感じたからではなく、自分の犯した過去の出来事の腑甲斐なさを顧みる事により、今一度、己の弱さを知らしめられたからだと思います。そんな中で、ペテロは「主よ、あなたは 何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」と言わざるを得ませんでした。自分の良いところも、悪いところも、過ちも「主よ、あなたは 何もかもご存じです」としか言いようがありませんでした。私たちも同じではないでしょうか。ペトロと同じ様な弱さや破れを持っているのではないのでしょうか。

でも、そのペテロをイエスは今一度、挫折の中から立ちあがらせます。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」それは、愛することつまり大切にすることが重要なのです。主イエスは「わたしの羊を飼いなさい。」とペトロに役割を与えられたのです。羊の群れはペトロの群れではなく、イエスさま、神さまの愛される、大切な群れなのです。ペトロはその群れの世話をすることを委ねられるのです。イエスさまから受けた愛があってこそ、できる働きだと思えます。イエスさまは、ペトロの愛を確認されたのです。「互いに愛し合う」ことが何より大切なのです。

「主よ、わたしに愛を増し加えてください。」と祈ります。

この後、イエスとペトロにあのイエスさまの愛した弟子のひとりである若きヨハネがついて来ていたのです。好奇心旺盛なペトロはこのヨハネのことが気になって、イエスに 21:「主よ、この人はどうなるのでしょうか」と聞くのです。ヨハネのことを気にしているペトロの心の内を知っておられるイエスさまは 22:イエスは言われた。「わたしの来るときまで彼が生きていることを、わたしが望んだとしても、あなたに何の関係があるか。あなたは、わたしに従いなさい。」と言われます。

主イエスと神に従うということは、人を見て行うのではなく、イエスに愛され、イエスを愛する、神を愛することということから来るのです。イエスに従うとは、低い所に自分を置く事だと言われます。なかなかできないのですが、そうだとも思わされます。

讃美歌 5 2 番「キリストにはかえられません」 2 節「キリストにはかえられません。有名な人になることも、ひとのほめることばも、このころをひきません」

私に対する、キリスト者に対する、人間に対する戒めの言葉だと思います。ペトロも弱さをもった人間でした。それでもイエスの十字架の愛に包まれて、人を愛して、大切にして生きて行ったのです。

わたしたちも、それぞれ弱さがありますが、神はわたしたちの弱さを、破れを包んでくださるのです。弱さを持ったままでペトロの歩みに続く者でありたいと願います。

◆イエスとペトロ

- 15:食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」と言われた。ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの小羊を飼いなさい」と言われた。
- 16:二度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの羊の世話をしなさい」と言われた。
- 17:三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロは、イエスが三度目も、「わたしを愛しているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何かもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」イエスは言われた。「わたしの羊を飼いなさい。
- 18:はっきり言うておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。」
- 19:ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして、イエスはこう言われたのである。このように話してから、ペトロに、「わたしに従いなさい」と言われた。

◆イエスとその愛する弟子

- 20:ペトロが振り向くと、イエスの愛しておられた弟子がついて来るのが見えた。この弟子は、あの夕食のとき、イエスの胸もとに寄りかかったまま、「主よ、裏切るのはだれですか」と言った人である。
- 21:ペトロは彼を見て、「主よ、この人はどうなるのでしょうか」と言った。
- 22:イエスは言われた。「わたしの来るときまで彼が活着していることを、わたしが望んだとしても、あなたに何の関係があるか。あなたは、わたしに従いなさい。」
- 23:それで、この弟子は死なないといううわさが兄弟たちの間に広まった。しかし、イエスは、彼は死なないと言われたのではない。ただ、「わたしの来るときまで彼が活着していることを、わたしが望んだとしても、あなたに何の関係があるか」と言われたのである。